

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘が、いちどしかひびかない



八戸市立 小中野中学校

平成29年10月30日(月)

No.101 文責：校長
工藤聡

ガッポーズとバッドマナー

昨日と一昨日の二日間は、青森県中学校新人卓球大会（いわゆる県大会）でした。私は青森県中学校体育連盟卓球専門部の部会長ということになっていますので、大会委員長という役割で行って来ました。大会委員長といっても、賞状を渡したり監督会議で挨拶するくらいで、特に役割がありません（市川先生は、県中体連卓球専門部の委員長ということで、この大会も受付から組み合わせなどの取りまとめ、大会本番も副審判長など大変な忙しさでした。）でしたので、二日間じっくり試合を見ることができました。小中野中からは、個人戦に柿 くんが出場し、1回戦は北五地区（五所川原市と北津軽郡）で2位の生徒に逆転勝ちをおさめるなど健闘しました。

試合を見て一つ気になったことがあります。それは、「ガッポーズとマナー」ということでした。最近の日本では、卓球競技がメジャーになりつつあり、混合ダブルス（男女でペアを組むのでミックスダブルスとも言います）を題材にした「ミックス」という映画が現在上映されています。また、福原愛選手や石川佳純選手、水谷隼選手など、卓球選手がテレビに登場する機会も増えました。卓球の試合結果がスポーツニュースで報じられることもあり、福原選手の「サ～」や中学生の張本選手の「チョレイ」などポイントを取った時の掛け声も有名です。今回の県大会でも、ガッポーズとともに声を出す選手が多く見られたのですが、そのやり方が本部役員の間で話題になりました。

本来のガッポーズは、喜びのポーズであり、拳を握り、両手もしくは片手を掲げることで表現します。スポーツなどで勝利した時だけでなく、良い成績を残した時にもよく見られます。たとえば、受験結果の発表を見に行き、合格した時や合唱コンで納得のいく成績を収めた時にもやったりします。卓球では、ポイントをあげた時に、「よ～し」という声とともにガッポーズをとったりします。しかし、これはあくまで自らを鼓舞（コブ：勢いをつける。励ます。）するためにやるのであって、相手に失礼があってはならないのですが、昨日までの県大会では、相手に見せつけたり、中には威嚇（イカク：おどしつけること）するようなものまでありました。実は、今年の夏の県大会のある競技（卓球に非常に似た、外でやる競技です）の決勝で、お互いが点を取り合うたびに見苦しいガッポーズの応酬（オウシュウ：互いに相手とやり合うこと）があって、観戦している人たちに軋轢（ヒンシュク：顔をしかめること）を買った（ヒンシュクヨカウ：不快だとしてきらわれる）ことがあったそうです。中には、「あんなチームを青森県の代表として東北大会におくってもいいのか」という厳しい意見もあったと聞きました。かつて、日本球界にダルビッシュ投手や田中将大投手がいた時も、相手チームのバッターを打ち取った時に、マウンドでほえるような大きな声を出すのは「失礼だ」という声もあったようです。

今回の県大会では、特に女子選手の声とガッポーズが気になりました。常識はずれの大声を出す、一回だけでなく三度も四度も出す、相手をにらみつけるように、まさしく威嚇するように出したりするなど、一人だけでなく複数の選手がやっていました。お互いがやりあうことによって、それがエスカレートし、ベンチに入ったコーチや二階席の応援団も巻き込んで、大変感情的になった試合では、審判長が“バッドマナー”ということで直接注意した試合もあったくらいです。こういった選手に対しては、やはり心から応援する気持ちにならないのが正直なところですが、また、試合に負けた結果、いつまでも相手選手の前で泣いていたり、タオルを叩きつけるように放り投げる選手もいました。そんな生徒を見ていると、何のために卓球や部活動をやっているのか、とても悲しい気持ちになってしまいます。ただ単に、試合で勝てばいいと思っているのでしょうか？勝てばうれしいのでしょうか、いつかは負けるはずですが、それでもやっているのは、自らを成長させるためですし、もっと簡単に言えば楽しいからやっているのではないのでしょうか。そんなことをして、楽しいはずがありませんね。

“バッドマナー”のガッポーズをとっている生徒は、相手を敬う気持ちがないのだと思います。卓球は、相手とボールを打ち合うスポーツです。相手がいなければ、一人では試合はできません。謙虚に相手に感謝する心があれば、そんな態度を決してとらないと思うのですが、小中野中のみなさんはどう思いますか？